

## 京都外国語大学ラテンアメリカ研究所講演会

嘉幡 茂 (かばた しげる)

(京都外国語大学・国際言語平和研究所・嘱託研究員)

### 「アステカの太陽神はイケてない? : 「病」は天使の証」

アステカ神話では、太陽はナナワツィンという神によって誕生した。この神は「皮膚病の神」や「腫瘍の神」と訳される。非常に不可思議である。なぜ神聖な太陽は、病に侵され全身カサブタだらけの神から誕生したのか。太陽神は世界中の古代社会に存在する。太陽神という言葉の響きからは、泰然とした高貴さを私たちにイメージさせるだろう。しかし、太陽神イコール「皮膚病の神」では、どうも締まらない。古代メソアメリカ文明圏は多神教であった。ケツァルコアトル（羽毛の蛇神）、トラロク（雷鳴の神）、ウエウエテオトル（火の老神）など、カッコいいと思える神は数多く存在した。なぜ、これらの中から「皮膚病の神」が選ばれたのか。そのヒントは、病は文化によって定義されることにある。つまり、ある社会での病は、別の社会ではそのようには認識されないのだ。古代メソアメリカ文明圏では、為政者と共に小人症やくる病を患った人物がしばしば登場する。為政者に随伴する彼らの役割とは何であるのか。考古資料とクロニカを基に、私たちににとっての疾患は、古代人にとっては「病」ではなく、むしろ神聖性を象徴する存在であったことを議論する。そして、当時の世界観に着目しながら、アステカの太陽神が「皮膚病の神」でなければならなかった必然について解釈する。

日 時: 2022年4月22日(金) 18時00分～19時30分

Zoomによるオンライン開催 参加費無料/事前予約要

主催: 京都外国語大学ラテンアメリカ研究所

〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6

Tel: 075-312-3388

E-mail: ielak@kufs.ac.jp